Culture in Psychiatry

C CINEMA

表現者としての栄光と，1人の少女としての悲劇

―ブラック・スワン―

小澤 寛樹　長崎大学大学院医歯薬学総合研究科精神神経科学教授

芸術は悲しみと苦しみから生まれる，という言葉が示すように，真に迫る作品や表現を生み出すためには内に抱える闇の部分をさらけ出すことを恐れず，時には自分の身を削ることも厭わないのが表現者の性であるのかもしれません。アメリカの思想家ラルフ・ウォルド・エマーソン（1803～1882年）は，「芸術家は自分の芸術の犠牲にならなければならない」といっています。

一流のアーティストを夢見る若き才能に限らず，学問やスポーツ，高度な専門性をもつ職業などの分野に身を投じようとするならば，少なからぬ犠牲を払わなければ目標に到達することは叶わないというのはある程度事実といえます。ここでいう犠牲とは，自分が対象に身を捧げている間に他人が享受しているかもしれない娯楽や趣味の時間，青春や恋愛といったあたりに相場が決まっているように思いますが，これが「命を脅かすほどの健康」となると話は全く違ってきます。

2010年のアメリカ映画『ブラック・スワン』に登場する若きバレリーナのニナも，自身の表現の限界や周囲からのプレッシャーを乗り越えようともがき苦しみながら，バレエに自らの生命を傾けていきます。ニナを演じたナタリー・ポートマン自身，1年におよぶバレエの特訓や10kg近い減量といったまさに身を削るような役作りの甲斐あって，この作品で第83回アカデミー主演女優賞をはじめ数々の栄誉を手にしています。

ニナが所属するニューヨークのバレエ団は，次回公演の演目である『白鳥の湖』のプリマを選抜しようとしていました。演出家のトマ（ヴァンサン・カッセル）に可能性を見出されたニナは，トマの下で長くプリマを務めてきたベス（ウィノナ・ライダー）やヴェロニカ，リリー（ミラ・クニス）といったライバルたちを押しのけて主役の座を射止めます。しかし，白鳥の湖のプリマは白鳥のオデットと黒鳥のオディールという全く性格の違う2つの役を1人で演じ分けなければいけない大変な難役です。もともと可憐で優雅なオデットは完璧に踊れる優等生のニナでしたが，魔性的で妖艶なオディールをうまく表現することができません。トマの過剰ともいえる演技指導や，元バレリーナである母親のエリカ（バーバラ・ハーシー）から受ける歪んだ愛情と期待，さらにはいつでも自分に取って代わろうとするライバルたちの存在に苛まれ，ニナは次第に幻覚や妄想に苦しむようになります。

役者が舞台に上がる前に感じる強い緊張感のことをトレマ（Trema）といいます。マリリン・モンローも時におかしくなる一歩手前までいったと表現したほどの恐怖感にも近い体験のことですが，ドイツの精神科医クラウス・コンラート（1905～1961年）は，これを統合失調症のはじまりの時期の緊張感に例えました。まさにこれからプリマとしての初舞台を迎えようとするニナの身には，このトレマによる不安と統合失調症の急性期にみられる特徴的な陽性症状である幻覚や妄想がオーバーラップして降りかかることとなります。

統合失調症という病気自体は，生涯有病率が0.85%（120人に1人）との報告からもわかるように舞台を目指す役者でなくとも誰でも発症する可能性がある疾患で，発症年齢はニナのように若年の15～35歳が大半を占めるといわれています。映画では，たびたびニナを苦しめていると思われる幻覚のなかでも，特に幻視（visual hallucination）が多く登場します。実際の統合失調症の症状としてこれほど明確な幻視が現れることは

SAMPLE

Copyright(c) Medical Review Co.,Ltd.